

下川町

長瀬 ほのか

1. 概要と歴史

1.2 概要

下川という地名の由来は、アイヌ語の「パンケヌカナン」（下の沢）という言葉である。

スキージャンプが有名で、郊外にはミディアムヒル(K点 65m)、スモールヒル(K点 40m、26m)、ミニヒル(K=8m)と 4 つのジャンプ台がある。小学校から高校まで一貫してスキージャンプを教えることができる環境が整っており、道立の北海道下川商業高校はスキージャンプで有名である。オリンピック金メダリストなどを多数輩出していて、トリノオリンピックでは、下川町出身であるスキージャンプ日本代表選手が 4 人選抜された。

「小さくともキラリと輝くまち下川」を目指し、町民と一丸となった意欲あるまちづくりをしている。

図 1 下川町の町章



出典：下川町役場 HP

下川町章は、下川町の「下」の図案化であり、将来への大きな躍進、北部北海道産業、文化の中心と盛りあがる発展意欲の底力及び、町民の円満なる愛郷の精神と、一致和合の姿を表象したものである。

図 2 「エゾリンドウ」と「トドマツ」



出典：下川町役場 HP

下川町の町の花は「エゾリンドウ」で、町の木は「トドマツ」である。共に 1978 年 1 月 1 日に制定された。

1. 2 歴史

1900 年	岐阜県郡上郡高鷲村（現郡上市）から 25 戸の開拓団が集団移住。
1902 年	上名寄、多寄、下多寄の各村が剣淵戸長役場（現剣淵町）から分離し、戸長役場を上名寄に設置。
1924 年	上川郡名寄町（現名寄市）から分村、上川郡下川村となる。
1949 年	下川町制施行される。初代町長に末武次郎吉が就任。
1951 年	開拓 50 周年。
2000 年	開拓 100 周年。
2004 年	市町村合併ブームの中、下川町議会定例会において合併しないことを表明。

2. 地図・地理

図 3 下川町の位置



出典：ウィキペディア

下川町は、北海道上川支庁管内、上川郡にある町である。隣接しているのは、上川支庁では名寄市と士別市。網走支庁では雄武町・西興部町・滝上町である。

天塩川の支流、名寄川の上流部にあり、北見山地の斜面が大部分を占めている。

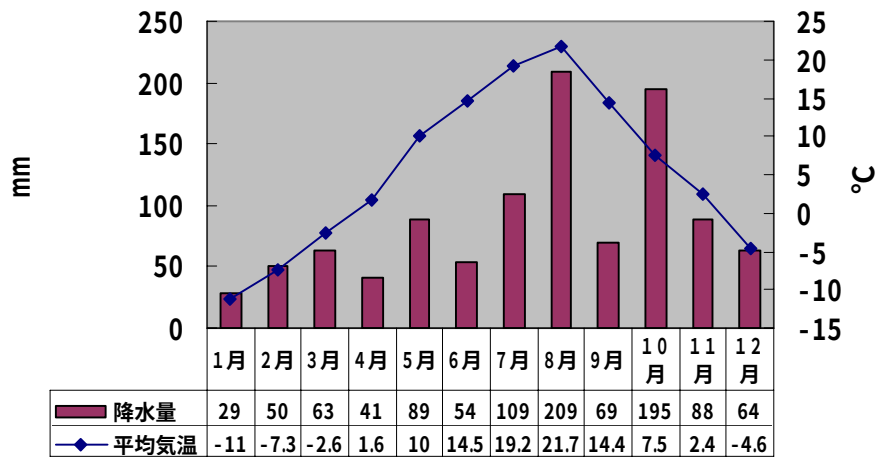
2005 年の固定資産概要調書によると、下川町の地目別土地面積は、山林が 89.9%と大部分であり、そのうち 90%が国有林、残りは町有林と私有林である。また、畑が 4.6%、田が 1.3%、牧場が 1.1%、雑種地が 1.1%、宅地が 0.3%、原野が 0.3%、その他が 1.3%である。

3. 気候

下川町の月ごとの平均気温はグラフ 1 の通りである。2006 年度の年間最高気温は 30.9℃、年間最低気温は-29℃で、年間平均気温は 5.5℃である。夏季は比較的高温で、夏と冬の気温差が大きい大陸性の気候である。

2006 年度の年間平均降水量は 88.3 mmで、年間合計降水量は 1060 mmである。

グラフ1 月別平均降水量と平均気温



<2006 年 旭川気象台>

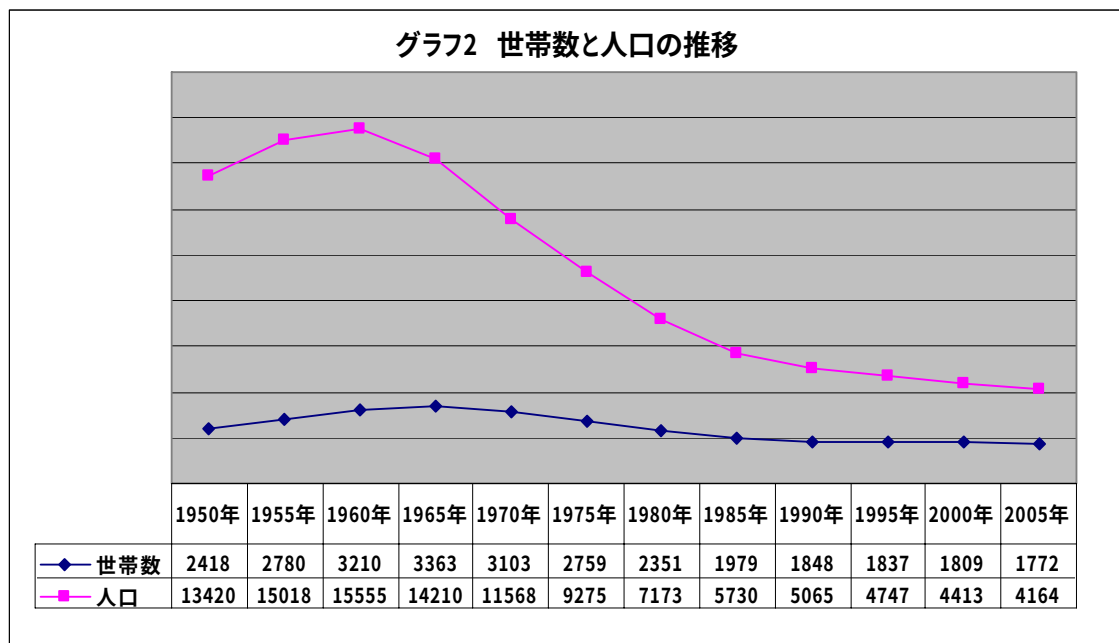
4. 人口

下川町の人口は、1960 年から 1985 年にかけて急激に減少しており、その後も減少を続け、2005 年の人口は 1960 年の 3 分の 1 である。世帯数も 1965 年から 2005 年まで減少が続いている。この人口の減少は旧国鉄の廃止・鉱山の閉山が原因である。

町の活性化を図るため、下川町商工会は「まちづくり協定」を制定し、地域の人材や資源を活かし、地域の中で資源が回り、その結果としてお金が回るという仕組みをつくることで「循環型のまちづくり」を目指している。また、森林を基盤とした地域産業を創出する産業クラスターに取り組んでいる。産業クラスターとは、取引、技術、資金、人材などの面で各種地域産業を連結した産業群のことである。産業クラスターが成功している例としては、北海道と人口が同程度のデンマークやフィンランドがあげられる。

下川町商工会「まちづくり協定」

- (1) 「アイスクャンドル」のイメージをショーウィンドーや欄間などに入れること
- (2) 「万里の長城」のイメージを腰壁 40cm 以内で御影石を使って入れること
- (3) 屋根は下川の森林イメージでグリーンに近い色とすること
- (4) 壁の色は明るい色にすること（色は特定せず）
- (5) 看板は必ず 10cm 角以上の文字で木を使うこと
- (6) 店にはどんなに狭くても木製のテーブル一つと椅子を 2 脚以上置くこと
- (7) レジカウンターは 0.4 平方メートル（40cm×1 m）以上の木を使うこと



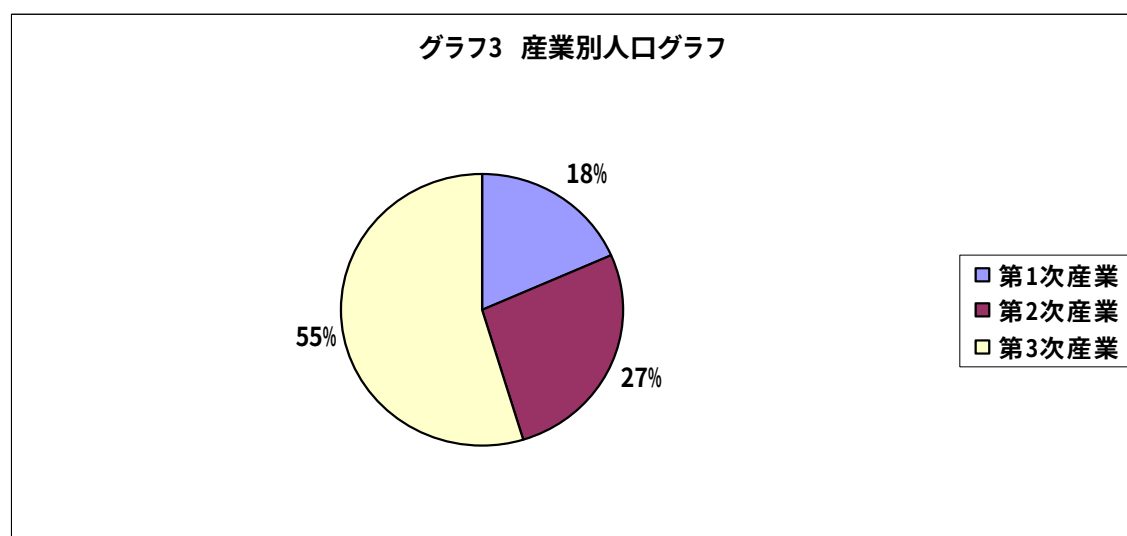
< 国勢調査 >

5. 産業

5.1 産業別人口割合

第1次産業の就業者数は407人で、全体の18%である。第2次産業は596人で27%であり、第3次産業は1218人で55%である。第3次産業が半分以上を占めている。

また、農業従事者の高齢化や担い手不足等の諸問題は下川町においても深刻であり、地域農業の担い手確保が急務となっている。

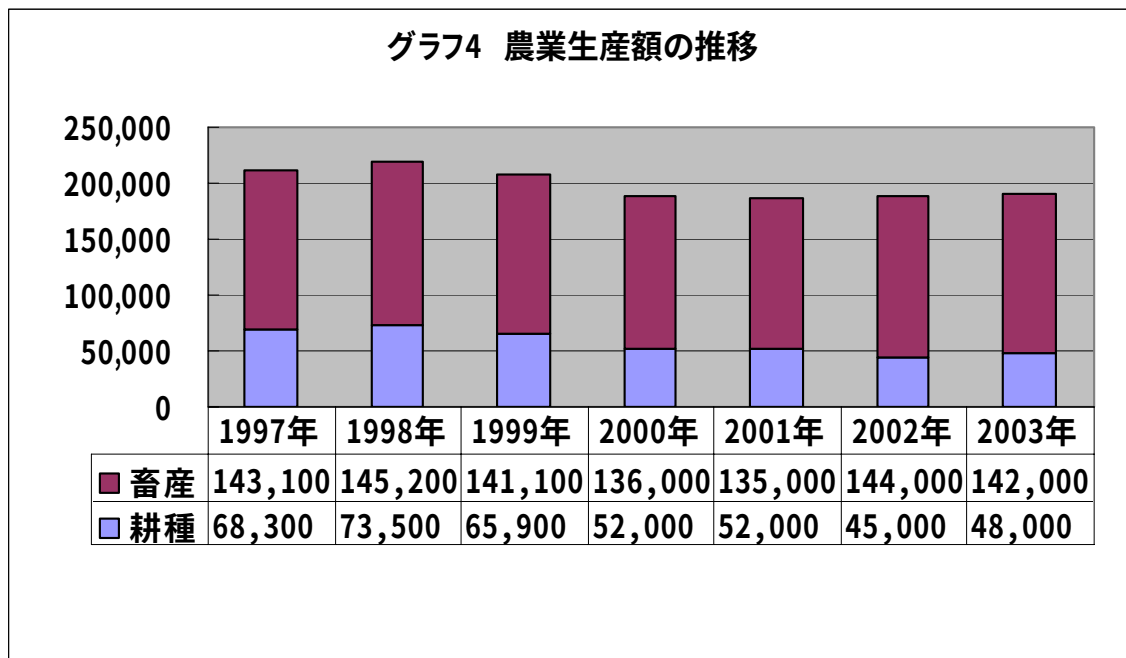


< 2000 年度 国勢調査 >

5.2 農業

農業生産額の内訳は、乳用牛が 60%、野菜が 20%、肉用牛が 8%、その他が 12%となっている。2000 年の農業人口は 710 人、農家数は 197 戸で、そのうち自給的農家が 12 戸、販売農家が 185 戸であり、また専業農家が 87 戸である。

機構は大陸の様相で夏季は比較的高温であり、その立地を生かして稲作と酪農を中心とする農業生産が進められてきたが、近年耕種においては施設野菜の生産拡大が進み、畑作＋施設野菜といった複合経営が主体となっている。主な農作物は、水稻、小麦、牧草、青刈りとうもろこし、ねぎ、トマトなどである。



＜北海道農林水産統計＞

5.3 林業

下川町は山林部分が約 90%と大部分であり、そのうち国有林は 48,508 ha.で約 85%、民有林は 80,48ha.である。総世帯数のうち林家数は 16.6%を占めている。

下川町は、1953 年、国有林 1,221ha の買受けを契機に施業案を作成し本格的な町有林経営を始めた。当時の施業は老齢過熟の大径木を中心にぬき切りをする天然林択伐施業でスタートしたが、翌年の台風 15 号による被害をきっかけに、現在は一定の周期で伐採、造林を繰り返す循環型林業経営を進め、資源が循環する新たな産業づくりに取り組んでいる。毎年 50ha の造林×60 年伐期の循環型森林施業を成熟させるため、今後も主伐事業により事

業面積を拡大していく予定であり、平成 25 年度を目処に念願の循環型森林施業（持続可能な林業経営）が確立させる予定だ。

また、カラマツの木材を原料とした木炭事業にも取り組んでおり、木材を活かしきるゼロエミッション型工場につながっている。下川町のプラントは、木炭づくりの過程で出てくる木酢や煙を製品の加工に使ったり、木材加工の過程で出るおが粉も炭にしたりと、さまざまな付加価値をつけることで工場全体のバランスを取っている。このプラントを見に、全国・世界から視察に来る人もいるほどだ。下川町の木炭は 100% 森林の手入れから出た木材のみを使用しており、重金属や化学物質の混入の心配もない。また、カラマツの木炭は、備長炭などと違い、軽くて火付きが早く、アウトドアなどで活躍する。

その他にも、アロマテラピー商品、バス・キッチン・サニタリー用品、ガーデニング・アウトドア用品、家具など、森林の恵みを生かした加工事業が発達している。

図 4 木材加工の様子



出典：下川町森林連合 HP

5.4 鉱業

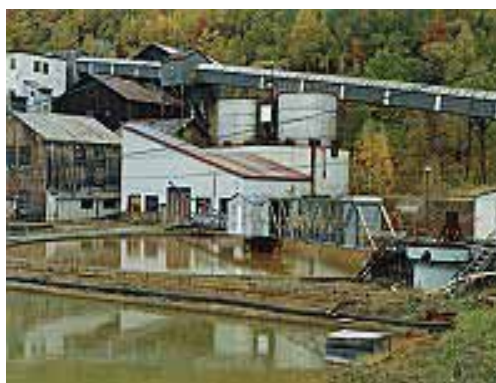
下川町は、三菱下川鉱山、三井サニル金山の大鉱山を有した鉱山町でもあった。

三菱鉱業下川鉱山は 1933 年に発見、41 年に三菱鉱山が操業した。鉱口がパンケ落合沢、元山の選鉱場と鉱山町がパンケ沢奥にあった。北海道の鉱山は金銀が最も多く、次に多いのはマンガンで、産業上有用な銅は少なかったため、ここは貴重な銅山であった。戦後合理化して日本 3 位の銅山となったが、82 年に閉山した。

その全ての施設は現在も残っており、日本でも希有な鉱山遺産となっている。

三井サニル金山は、三菱鉱業下川鉱山と国道 239 号を挟んで奥 20km にあった。大正 6

図 5 三菱鉱業下川鉱山の施設



出典：北海道文化資源データベース

年に開鉱し、15年に三井が買収し、昭和10年には最大日産200トン処理体制となったが、18年に最大の金310kg生産し、金山整備令で休山し、40年再開したが40年代に閉山。現在は水力発電所、坑道、流下式選鉱場、3沈殿池が山中に残っている。

6. 特産品と観光

6.1 特産品

図6 手延べ麺



出典：下川町役場 HP

●手延べ麺

食品添加物など一切使わず職人の手により作られた麺は、独特の腰の強さとなめらかな舌ざわりで日本最北の手延べ麺として、脚光を浴びている。

●トマトジュース「元気」

厳選された完熟トマト（桃太郎）を原料とし、砂糖や防腐剤など添加物を一切使用していない100%果汁のジュース。コクのある豊かな味を楽しめる。

図7 トマトジュース「元気」



出典：下川町役場 HP

その他、鹿肉の缶詰「草原のくじら」、すももジャム、笹茶、樹木・木酢を使った商品など、さまざまな特産品がある。

図8 万里長城



出典：下川町役場 HP

6.2 観光

●万里長城

市街地から南へ1km、緩やかなカーブを描く丘陵に延々とつづく石の城壁である。草地造成で出た石を利用して、日本一の手づくり観光を目指し、昭和61年町民の手づくりでスタートした。石を一つ一つ積み上げ、その積み上げた石に記念として名前を刻み込むというアイディアも生まれた。これが、体験型観光として、またユニークなまちおこしとして全国に広まり、毎年1万人を超える観光客が石積みを訪れ、石積みを通して町民との交流が図られている。5月の桜の時期には「万里長城祭」が行われ、2月には「アイスクャンドル・パーク」が開催されている。2000年秋、2000m

築城を達成した。

● アイスキャンドルミュージアム

アイスキャンドルは今や「北海道の冬の風物詩」として知られるようになった。このアイスキャンドルの発祥の地である下川町において、毎年 2 月、町全体がアイスキャンドルの灯りで彩られる「アイスキャンドルミュージアム」が開催される。万里長城を会場とする「アイスキャンドルパーク」では 1000 個のアイスキャンドルとカクテル光線による白樺のライトアップが神秘的な氷と光の空間を創り出す。2 月 14 日のバレンタインデーにはカップル限定企画も実施している。

図 9 アイスキャンドルミュージアムの様子



出典：下川町役場 HP

● しもかわうどん祭り

下川の職人が丹誠を込めて作り上げた町の特産品「手延べうどん」を広く PR していくことを目的に開催されている。売店においていろいろな味の手延べうどんが食べられる。料理ショー、うどん早食い競争、手延べ体験、手延べうどん料理コンテストなどの催し物が行われる。

● 五味温泉

昭和の初期には下川鉱山の保養施設として利用されていた。下川市街から約 6 km に位置し、周囲はまるごと自然に包まれている。100 年の歴史をもつ、山あいの静かな温泉地である。

図 10 五味温泉



出典：五味温泉 HP

◇参照ホームページ◇

下川町役場 HP :

http://www.town.shimokawa.hokkaido.jp/Cgi-bin/odb-get.exe?WIT_template=AM04000

下川町森林連合 HP : <http://www.shimokawa.ne.jp/shinrin/>

下川産業クラスター推進部 HP : <http://www2.town.shimokawa.hokkaido.jp/cluster/>

地域づくりの新しい挑戦 : <http://www.tohoku-drc.or.jp/research/community/index.html>

わがマチ・わがムラ : <http://www.toukei.maff.go.jp/shityoson/index.html>

五味温泉 HP : <http://www.shimokawa.ne.jp/gomionsen/>

ウィキペディア : <http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8B%E5%B7%9D%E7%94%BA>